十島村教育委員会だより　令和５年５月号

心わかかーカラ情報

南北１６０km
「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育
十島村教育委員会
〒892-0822鹿児島市泉町13番13号
TEL　099-227-9771

一歩踏み出すだけで，可能性は広がります！

教育長　木戸　浩

大型連休が過ぎ，新学期が始まって２か月が過ぎようとしています。新しい環境に身を置いた人も多いと思います。新しい学年，新しい学校，新しい先生等……。はつらつとした新鮮さと希望，そしていくらかの緊張感もあります。新しいこととの出会いも少し落ち着いて，緊張も解けてきたのではないでしょうか。

◎「砂まみれ」の先に
～自発的な遊び込みから学びへ～

誰もが幼いころに一度は経験したことのある砂遊び。実はこの砂遊びに，たくさんの教育的効果があることをご存じですか？その前に，砂場の始まりを紹介しておきましょう。

アメリカのボストン市内で医者として働いていたドイツ生まれの女性，ザクルシェフスカさんは，ボストン市内のスラム街で毎日のようにケンカや犯罪が横行していることを心配していました。「こんな悪い環境の中で育つ子どもたちを何とかしてあげたい」と思っていた彼女は，ふと，昔のドイツベルリン市内の光景を思い出します。それは，ベルリン市内の街角に砂を盛った場所が作ってあり，子どもたちが自由に遊べる場として提供されていた光景です。

早速，彼女は行政機関に強く働きかけました。そして1885（明治18）年，ボストン市ノースエンド地区に「砂を盛った場所」が設置されたのです。するとどうでしょう。その場所は子どもにも大人にも大人気になりました。穴を掘り，山を作り，歌を歌い，砂まみれになって遊びに遊んで，夕方スカッとした顔で帰っていく子どもたち。問題行動は激減し治安も安定してきました。これを見た大人たちは，砂場の教育的効果を認識し始めたのです。今から130年も昔の話です。今でもアメリカボストン市内のパーメンターストリートには，「砂場発祥の地」という表示板があるそうです。ちなみに日本では明治30年代以降に幼稚園を中心に導入され始めたようです。（児童心理学者倉橋惣三氏が提唱。多摩霊園に句碑：自ら育つものを育たせようとする心，それが育ての心である。世の中にこんなに楽しい心があろうか。）

手のひらと指先の感覚を敏感に働かせながら砂と水をほどよく調合し，核となる砂の塊をつくる。両手で転がし丸めながら，さらさらの砂をまぶしては両手で磨くことを繰り返しお気に入りの砂団子をつくりあげ，「ほらっ」と誇らしげに差し出す笑顔。

砂遊びには，集中力と努力，試行錯誤と見通し，協力と貢献などの精神性，更には教科学習の根底となる要素も多く含まれていることを見逃してなりません。

たかが砂遊び。されど，そこには子どもの成長や心身の発達はもちろんのこと，遊びの環境を見直す意外かつ重要な側面を見いだすこともできます。約150年前，ボストン市のスラム街に砂場を設置することに貢献したケイト・ガネット・ウェルズさんの言葉が残っています。「砂まみれ，泥まみれで遊ぶのは，子ども時代の特権である」。かつてドイツには，「砂は最良のエデュケーター（教育者）」という言葉もあったそうです。

砂まみれ，泥まみれ，汗まみれ。夢中になってまみれた後の爽快感や達成感。この経験が将来の職業への取り組み方にもつながることは，容易に想像できます。目に見えてまみれた（よごれた）からこそ，その後に手や体を洗うという習慣も身に付くのです。子ども時代の「砂・泥まみれ効果」を再評価し，とっぷりと経験させたいものです。えっ，ゲームまみれ？　その先には何が想像できるでしょうか？

ロバート・フルガムが書いてベストセラーとなった本のタイトル「人生で必要なことはすべて幼稚園の砂場で学んだ」は，印象的です。
砂場に限ったことではなく，幼いころに過ごす場所，つまり保育の場というものが，子どもにとっても大事な場所になることは間違いなさそうです。長年私立保育園保育士や園長を歴任され，現在，白梅学園大学子ども学部教授として活躍されている近藤幹生氏の言葉です。「就学前は遊びを基本とする保育という概念が重要。ですから幼稚園と保育所についても保育が基本で，それは人を育てるという広い意味での教育（教育の目的→「人格の完成，社会の形成者」：知・徳・体の調和）と考えています。子どもたちが自発性をもって様々なことに触れたり，発見したり，遊びを通して経験することが何よりも大事なのです。」

十島村でも，各島に「子育て施設」があります。幼児教育をスタートとして，砂場の効用を高めていけたら，大きな未来につながっていくと思いますので，地域の方々も温かく見守っていただけたらと思います。

～お知らせ～
「生涯学習県民大学講座」　7月25日(火)ＴＶ会議
午前　人はそもそも異なっている
午後　十島村のICTリテラシー向上を目指す

【新聞に投稿】※学年は投稿時

令和５年５月２１日　南日本新聞「若い目」掲載）

減ったタケノコ

平島中３年　小和瀬　麦

鹿児島市から南へ約２５０キロ、ここ十島村の平島では、５月中旬に大名竹のタケノコを採ります。それを給食で１年間使います。そのため全校生徒十一人と全教職員９人で、タケノコを採るのです。

タケノコがたくさん採れる場所を、島民に譲っていただきました。しかし、採れた量は去年の半分に減りました。

また今年、平島に赴任した先生２人が、竹やぶで道に迷ってしまうハプニングもありました。採取して帰校し、皮むきまで約３時間。その後、ゆでるために給食の担当者に渡しました。

平島に住んで６年。人も減ったけどタケノコも減りました。１年分の給食には足りないかもと心配しました。

足りなければ、モウソウチクのタケノコを買って使うそうです。どちらももおいしいので、給食が楽しみです。

（令和５年５月５日　南日本新聞「若い目」掲載）

あおぞら活動

悪石島小３年　つはこ充航

あく石じまには対馬丸いれいひがあります。なぜかというと、せんそう中にあく石じま近くの海で対馬丸がしずんだからです。ぼくたちは月に１回「あおぞら活動」としていれいひをそうじしています。

この前、対馬丸のちんぼつやいれいひのそうじなどについて、じゅぎょうがありました。おきなわには対馬丸記ん館があり、いれいひはおきなわとあまみ大しまにもあると聞いて、おどろきました。

それでぼくたちもいれいひのそうじを、負けないようにしたいと思いました。おきなわときにぼくたちの学校にはげましの手紙やおかしがおくってきます。

あく石じまのことをいろいろな人が知っているので、いれいひのそうじにやる気が出ました。

子供のうた

（四月十八日　南日本新聞掲載）

みんな　きせき

てんちゃんが教えてくれた
赤ちゃんが生まれてくるのは
きせきなんだって
だから
学校はきせきのあつまり
なんだって
ぼくが学校にいるのも
きせきなんだよ
先生は知っているのかな
みんなに教えたいな

中之島小
二年　小原澤　良馬

十　島　村　で　学　ぶ

【 小宝島での十四年間 】

小宝島中３年　岩下　和矢

私は、生まれてから十四年間小宝島に住んでいます。小学校に入学した時のことを思い出すと，同級生や先輩方に囲まれていて、何も気にせず先輩方についていくだけだった自分を思い出します。月日は流れ，私は今年で中学三年生になりました。短いようで長かった小宝島での生活は、私の思い出に深く刻み込まれています。

小宝島で学んだことの中で特に大切だと思ったことは，自ら率先して動くということです。小宝島のような離島ではその年ごとに人の入れ替わりがあるので，誰かがやってくれるのを待つのではなく，自ら率先してやることが大切だと感じました。人によっては，自分から動くのが苦手な場合もあります。私達，上級生が行動しないと学校全体のまとまりが崩れてしまうので，そのようなことが起きないように，上級生が協力して，学校をまとめていけるように努力することも大切だと学びました。また，学校をまとめるためには人の話を理解しながら聞くことも大切です。私は，人の話を理解するのが苦手でした。小宝島では，生徒が少ないので言われたことをしっかり聞いて理解しないと，誰にも聞くことができません。なので，人が話すとき，内容を自分で理解できるよう意識し，うまく状況を把握するように心がけました。

離島なので，不便なことも多いですが，その分，ここでしか学べないことがあります。これからの人生，小宝島で学んだことを大切にしていきます。

【宝島小・中学校からのメッセージ】

養護教諭　上野友江

宝島に赴任して３年目を迎えました。

保健室から見えるきれいな海には毎日癒しを，子供たちからはたくさんの笑顔と元気をもらっています。

明るく素直な子供たち。宝島にきて一番感動したことは，宝島の地域全体で子供を見守り育てているということです。

宝島の優しく包み込んでくれる雄大な自然は、子供を強く，逞しく，島民の方々の優しい声掛けと見守りで子供たちは健やかに成長しています。様々な学校行事にも島民の方が多数参加・協力してくださり，地域一体となった教育活動が展開されています。このような環境で学習できる子供たちは幸せだなと思います。人と人とのつながりが宝島の「宝」だなと感じました。

また，スティールパン演奏や給食業務等，十島村でしか体験できないような素敵な経験が私自身を成長させてくれていると思います。

養護教諭として、子供たち一人一人と向き合い，心に寄り添い，関わりを深めていきたいです。子供たちが１５の旅立ちで島を離れてからも，心身共に健康な生活を送ることができるよう，精一杯頑張りたいと思います。宝島での出会いに感謝し，少しでも恩返しができるよう努力していきます。

『教職員仲間であるあなた』への　私からのメッセージ

距離は離れていますが，「十島は一つ」の心で繋がりを大切にしていきたいです。村教研でお会いできるのを楽しみにしています。